

東北大学医学部

後援会会報

No. 16
2016.2

発行：東北大学医学部後援会
編集委員会 平成28年2月

医学部学生後援会（PTA）の充実を願いつつ。

東北大学医学部後援会会長
東北大学加齢医学研究所基礎加齢研究分野

堀内 久徳



医学部後援会は、平成20年4月に、東北大学大学院医学系研究科と医学部の教育の充実さらに研究の発展、あわせて会員、学生及び教職員等の親睦を図ることを目的に発足しました。ご父兄からの会費で成り立っており、主な諸事業として、4月に入学記念祝賀会を主催し、年2回会報を発行して医学部の状況をご父兄にお知らせしております。また、学生の実習や課外活動等の支援として、卒業時の謝恩会、東北大学附属図書館医学分館での学生用教科書の整備及びオープンキャンパス等への助成も行っております。最近、様々な支援要請を受けるようになってきており、この後援会が順調に定着してきたことを喜んでおります。

ご父兄の皆様方には、引き続き医学部後援会をお引き立て下さいますようよろしくお願い申し上げます。医学部後援会は、微力ながらも全力を尽くして東北大学医学部を盛り立てて参りたいと考えております。

さて、このような医学部後援会ですが、時々、どのよ

うな活動をしているのかと質問を受けます。そのため、役員会で話し合いの結果、平成28年4月1日から、**医学部後援会**を**医学部学生後援会**に名称を変更することに致しました。

また、適宜、PTAという名称も使っていこうという話し合いになりましたので、会員の皆様にはご了解をいただけましたら幸いです。

本後援会会長は、発足時から5年間、医学部法医学教室の舟山真人教授が務められました。

その後、私が、平成25年4月から引き継がせていただきましたが、本年3月を持ちまして任期が満了となります。この3年間努めて参りました任期の間は、諸方面の先生方には大変お世話様になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。平成28年4月からは、東北大学大学院医工学研究科分子病態医工学教室の教授阿部高明先生が会長となりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

— 研究室（分野）紹介 —

医学科・器官解剖学（旧解剖学第一講座）分野

医学部医学科

教授 大和田 祐二

器官解剖学分野は、本学の開校と同時に開設された解剖学講座の流れをくむ発生物学分野（旧第3解剖学）の後継として、私が、平成27年4月に山口大学から教授として着任し、新たに設立された分野です。

私たちが研究で目指しているものは、脂質の生体機能メカニズムの解明です。脂質は、生体にとって不可欠な栄養素であり、あらゆる生命現象に関与します。一方

で、脂質の過剰摂取が肥満や糖尿病の原因となり、社会的な問題となっており、個体の脂質恒常性維持の分子基盤の確立が急務となっております。私たちは、これまでに脂質代謝のカギを握る分子である脂肪酸結合蛋白質（FABP）という分子に着目してきました。FABPは、水に不溶性な長鎖脂肪酸に結合し、脂肪酸が細胞内で機能を発揮する上で必須な分子と考えられていますが、その機

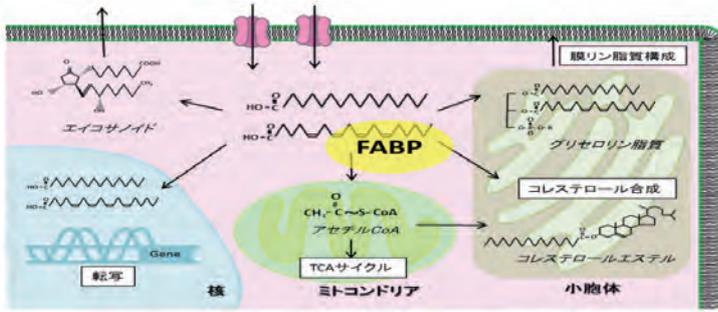


図1 脂肪酸結合タンパク質 (FABP) による細胞内脂質代謝の調節機構

構はほとんど解明されておられません。

私たちは、FABP の神経系や免疫系細胞における局在を報告し、各種 FABP ノックアウトマウスが、情動系の行動異常や免疫反応の異常が見られることも報告しました。さらに、その異常に潜むメカニズムの解明に研究を集中し、FABP5 が表皮細胞の増殖・分化に脂質代謝産物の量的調節を介して関与すること、複数の FABP (FABP5、FABP7) が、神経系のグリア細胞の一つであるオリゴデンドロサイト系細胞の分裂・分化過程を制御すること、さらに、グリア細胞膜の脂質微小ドメインである脂質ラフトの活性に主要な役割を担う CAVEOLIN の発現やラフトへの局在が FABP7 によって制御されることについて報告してきました。

これらの知見は、乾癬などの皮膚疾患、統合失調者や自閉症などの精神疾患が、細胞の脂質恒常性異常と深く

関連していることを示す重要な知見として大きな注目を集めています。さらに、国内外の共同研究を活発に展開し、血液脳関門の脂肪酸通過メカニズムや脳内のカナビノイド産生と痛み発生のメカニズムに関する新知見を報告しています。

確固とした研究基盤を背景に、次代の医療・医学を担う優れた人材をしっかりと育成すること、それが私たちのもう一つの重要な責務だと考えています。

学部学生の教育では、医学専門教育の入り口ともいえる肉眼解剖学や脳解剖学教育を通して、豊かな人間性・創造性を持った医師・研究者を育成することを講座員一丸となって日夜目指しています。

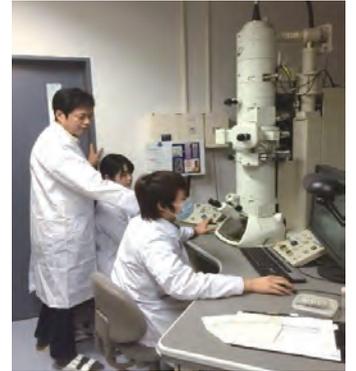


図2 医学部学生への研究指導風景

研究室では、多くの医学生とともに、国籍や出身学部を問わず様々な専攻の研究者が集い、国際社会に貢献できる専門医療人・研究者の育成に努めています。

今後は、一人でも多くの研究者や医師が私たちの研究室から世界に羽ばたくことを願っています。

保健学科・分子内分泌学分野

医学部保健学科保健学専攻

教授 菅原 明

分子内分泌学分野は、2011年6月に開講した新しい分野で、保健学専攻検査技術科学コース臨床検査医科学領域に属しております。2015年度の陣容は、教授1名、助教2名、技術補佐員2名、博士課程3名(うち1名はバングラディッシュからの留学生)、修士課程5名、卒業研究2名、基礎修練(医学科)1名です(集合写真参照)。



私は、昭和62年に東北大学医学部を卒業し、東北大学医学部第二内科(現:腎・高血圧・内分泌科)内分泌グループの出身で、現在も東北大学病院及び宮城県立がんセンターで内分泌・糖尿病・高血圧の患者さんの診療を行っています。

研究内容としましては、転写因子・エピジェネティクスといった基礎的研究から新規創薬まで多岐に亘っております。以下に、現在進行中の研究内容の一部をお示しします。

1. 脂肪細胞由来の未知の昇圧因子の探索

肥満患者さんで高血圧が多いことは良く知られております。最近の知見では、脂肪細胞から未知の昇圧因

子が産生され、それが副腎に作用して昇圧ホルモンであるアルドステロンの分泌を促している可能性が考えられています。当分野では、プロテオミクス・分子生物学的手法を用いて、脂肪細胞由来の未知の因子を同定して、肥満高血圧の病態解明を行うとともに、肥満高血圧の新規診断と治療法の開発を進めております。

2. 糖尿病性腎症の新規治療法の開発

糖尿病性腎症は、糖尿病の合併症の一つですが、本邦における新規透析導入患者さんの第一位を占めており、その新規治療法の開発が緊喫の課題となっています。

近年、糖尿病性腎症の発症に高血糖状態で活性化される転写因子である ChREBP の関与が推定されております。そこで、我々はノックアウトマウスを用いた解析により糖尿病性腎症の発症における ChREBP の役割を明らかにするとともに、腎メサングウム細胞の安定発現株を用いて化合物ライブラリーのハイスループットスクリーニングを行うことにより、糖尿病性腎症の新規創薬を目指しております。

3. クッシング病の新規治療薬の開発

クッシング病は、厚生労働省の特定・難治性疾患に指定されている病気腫瘍で、ステロイドホルモン過剰により高血圧・糖尿病・心不全などさまざまな症状を呈する予後が不良な疾患です。第一選択としては外科手術ですが、手術無効例や再発例も少なからずあります。しかしながら、いまだに下垂体腫瘍に有効な薬剤は存在しておりません。ごく最近、我々はビタミン A の誘導体でホルモン核内受容体であるレチノイド X 受容体に作用する HX630 という薬剤が、クッシング病の新規治療薬たりうる可能性を見出しました。今後は、同薬剤の臨床応用に向けて、尽力していきたいと考えております。

このように、当分野では、基礎的研究成果を臨床の現場にフィードバック出来るように、日夜研究に励んでおります。

興味をお持ちの学生さんは、ぜひ当分野に見学にいらして下さい。

一緒に研究を進めましょう。

保健学科の教育環境整備について

医学部保健学科長

清水 律子

2006 年度に改修された保健学科大講義室は、当時整備したプロジェクター等の経年劣化により、可能な限りの調整をしても投影資料本来の色や形がクリアに映らないという状態でした。授業のみならず各種学会の研修にも使用される大講義室のプロジェクターの更新とプロジェクターの性能に見合ったワイドスクリーンの設置が待望されておりました。



また、大学院学生の増加に伴い、小会議室及び中会議室でも授業やゼミを行う機会が多くなり、白い壁などを利用してプロジェクター等を投影しておりました。持ち運びのスクリーンでは不便なため、天吊りスクリーンの設置についても要望がありました。

このような状況から、医学部後援会に教育環境の整備についてお願いしましたところ、液晶プロジェクター 1 台、電動ワイドスクリーン一式（1 台）及び手動式スクリーン一式（2 台）のご支援をいただきました。

早速、最新機器を使用して、より充実した授業やゼミを実施しております。

この度はご支援をいただき、誠にありがとうございました。

この場をお借りし、改めて感謝申し上げます。



平成 27 年度医学部オープンキャンパスを開催しました

医学部オープンキャンパス推進委員会

委員長

保健学科広報部会長

大学院修士課程長

中里 信和
塩飽 仁
中山 啓子



平成 27 年 7 月 29 日（水）、30 日（木）の 2 日間、東北大学医学部・医学系研究科オープンキャンパスが、星陵キャンパスにおいて開催されました。素晴らしい天気の中、学生実行委員、推進委員、事務部が一

体となって、ほぼ昨年並みの 5,478 名の来場者をお迎えすることができました。

医学科からの報告です。今回も充実した企画を揃え、来場者に医学科をより深く理解してもらうことができるような内容となりました。「医学科案内ツアー」は、研究現場、最新の研究・治療機器などを見学しましたが（左写真下）、例年通りとても人気の高い企画でした。また、



大学での講義や実習を体験する「模擬講義・震災講演」、「実験実演コーナー」さらに、星陵会館のスキルズ・ラボで「手技体験コーナー」、「救急体験コーナー」を行いました。これら大変好評でした。この他、「医療を覗き見（ビデオ上映）」では医学科学生が高校生たちに解説を行いながらの上映を行い、「入試体験談コーナー」では、高校生からの様々な質問に答えましたが、いずれの企画にも多くの高校生が詰めかけました。加えて、参加者がより楽しめるよう「シールキャンペーン」（シールを集めて景品と交換）や「Twitter での実況」を新たに企画し、好評を得ました。

さらに、医学部・大学病院百周年に関する展示コーナーを出展するとともに、「大学病院」、「加齢医学研究所」、「エコチル」及び「東北メディカル・メガバンク機構」からも出展があり、参加者にとって得るものの多いオープンキャンパスとなったことと思います。

保健学科からの報告です。「模擬講義」、「保健学科案内ツアー」、「実習体験コーナー」、「デモンストレーションコーナー」、「展示コーナー」の企画を準備し、各専攻の特徴を分かりやすく理解できる機会を設けました。また、「保健学科入試・カリキュラム・卒後の進路等の相談コーナー」の他、「卒業生と語ろうコーナー」、「在学生による入試体験談や学生生活相談コーナー」では学部及び大学院生、卒業生と触れ合う場を設け、卒業後の進路までをイメージしてもらえるように工夫しました。

看護学専攻では、多くの学生ボランティアの協力を得て、ツアーや実習体験コーナーなどを準備しました。参加者は、実際に新生児モデルに触ったり、看護の基礎的な技術を体験したり、様々な体験を楽しんでいました。



放射線技術科学専攻では、大学院生が中心となって実行委員会を組織し、ツアーやデモンストレーション、模擬講義での専攻紹介を実施しました。模擬講義は、分かりやすい講義で好評でした。



検査技術科学専攻でも学生がツアーや展示を実施する他、模擬講義も担当しました。展示コーナーでは、検査の内容や学生生活について、ポスターを使って丁寧に説明していました。

大学院医学系研究科からの報告です。大学院パネル展示コーナーにおいて、大学院学生や教員が、大学院の紹介を行いました。医学部進学者が卒業後、どのよ



うなキャリアを積んでいるのかを紹介する場となり、参加した高校生にとっては大学進学だけでなく将来について考える機会を与える場となりました。

夏らしい青空のもと、暑さに負けないくらい盛況な2

日間のオープンキャンパスとなりました。最後に関係者を代表して、医学部後援会からのご援助に心から感謝申し上げます。

保健学科ウェアセレモニーについて

医学部保健学科長

清水 律子

保健学科ウェアセレモニーは、学外で行う実習の開始前に、決意や心構えなどの意識付けのために、白衣等の着衣を供与し平成23年度からセレモニー化されました。今年度は、看護学専攻が7月23日（木）、検査技術科学専攻が9月28日（月）、放射線技術科学専攻が9月30日（水）にそれぞれ実施しました。

今年度からは、予算の関係上、供与品無しでセレモニー



を実施する予定でしたが、医学部後援会のご支援により、各専攻の学生に対して、バッチ、賞状、メ

ディカルシューズ等をそれぞれ贈呈できました。

この度はご支援をいただき、誠にありがとうございました。

この場をお借りし、改めて感謝申し上げます。



第9回リトリート大学院生研究発表会について

第9回リトリート大学院生研究発表会 実行委員会

去る、平成28年1月23日（土）に、医学部後援会のご支援により東北大学星陵キャンパス星陵オーデトリウムにおいて、『第9回リトリート大学院生研究発表会』が開催されました。



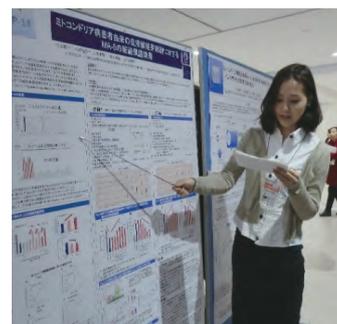
このリトリートは、医学系研究科の多様な分野に所属する大学院生が集まり、学生が主体となって役割や

仕事の分担、会議などを経て作り上げた研究発表会です。例年、大学院生だけでなく多くの医学部学生にも参加して頂いております。第9回を迎えた今年度は、「若手研究者が拓く医学研究の未来 ～100周年からの第一歩

～」というテーマを掲げて開催いたしました。

このテーマも学生同士の議論で決定したもので、100周年を迎えた東北大学医学部の歴史に更なる未来の1ページを私たち学生の手で切り拓いていくのだという決意が込められています。

このテーマのもと、今年度新たに完成した星陵オーデトリウムへと会場を移動し、合計112題（口頭演題25題、ポスター発表87題）という過去最多の演題数を受け付けるなど、まさにこれまでにない挑戦ばかりの企画となり、企画実行にあたり



戸惑うことも多くありました。しかし、当日は分野や研究室の壁を越えた活発で熱い議論や温かい交流で溢れかえっており、医学系研究科内での更なる相互交流や研究の発展に繋がる発表会になったと確信しております。



さらに、今回のリトリートで、9名もの医学部学生から応募があり、2名が口頭発表、6名がポスター発表を行い、1名が抄録集への掲載となりました。いずれも大学院生顔負けの素晴らしい発表であり、その活躍に医学部後援会から優秀学生賞が授与されました。

末筆ではございますが、本研究発表会の開催にあたりご支援、ご協力を賜りました皆様方並びにご来場頂きました皆様方にこの場をお借りして、実行委員会一同心からお礼申し上げます。

医学教育推進センターの活動について—研究能力と国際能力の開発—

医学部医学教育推進センター

准教授 石井 誠一

「研究に興味があるので希望しました」とは、東北大学医学部の入試面接で、しばしば聞く志望動機です。東北大学が、研究重視を理念に掲げていることを受験生は、よく知っています。医学科の1年生が入学早々に行うキャリア・プランのグループ討論でも、研究志向の声が少なくありません。そこで、研究を志す学生をサポートする様々なシステムと国際化推進についてご紹介したいと思います。

医学科では、1年生の7月に研究室訪問の期間を設けて、各自が興味のある研究室を訪れます。これをきっかけに毎年10人前後の1年生が、研究室に通って実験を始めます。3年生は必修プログラムとして、10月から翌年の3月までの半年間、希望する研究室に配属になり、個別のテーマで基礎医学の研究に取り組みます。この

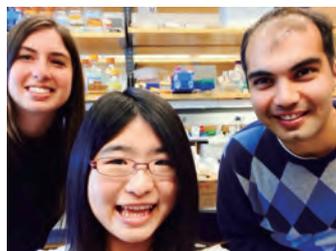


写真1 海外研究留学中の橋田典子さん（2014年度3年生）

間、他の授業はなく、フルタイムで研究に専念します。この期間中に、毎年30名前後が海外に研究留学しています（写真1）。

3月には研究成果発表会を開催し、留学生は英語で成果発表とQ&Aを行います。このような医学科の研究教育は、2012年度に文部科学省から優れた教育事業に選定され、『世界で競い合うMD研究者育成プログラム』として、一層、充実を図ることができました

(MDはmedical doctorのことです)。

研究で成果を挙げた学生が、国内外の学術集會に発表者として出席するときには、旅費と学会参加費を助成し、海外留学生には、留学経費を助成しています。実験の経費や論文発表の掲載費などもサポートの対象です。毎年、1年生から6年生まで30人前後が研究コースに登録して、20人以上が留学や国際学会発表の助成を受けています。国内の学会でも毎年、10人以上が発表し、やはり旅費などの助成を受けます。

留学や国際学会の発表では、英語能力が不可欠です。そこで、3年生の4月から7月まで、集中的に医学専門英語の授業を行っています。この授業では、外国人英語講師6名による少人数グループ英会話と医学英語専用のソフトを使ったe-learningで英語力を鍛えます。また、自由選択クラスとして、English Café、English



写真2 英語コミュニケーション能力開発コース

Communication Course と呼ぶ2つのプログラムを用意して、毎週、グループ英会話を行っています。2015年度は、1～6年生まで合わせて40人以上が参加し、米国人の語学講師と外国人留学生を相手に、特に、異文化について様々なトピックで討論して、英語コミュニケーション能力を磨きました（写真2）。

今年は、1年生がたくさん参加して、とても活気がありました。また、東北大学は、全学生を対象に Tohoku

University Global Leadership Program(TGL プログラム)を用意して、国際化を推進しており、この3月に医学科の学生7名が、アメリカ、イギリスなどに留学します。

研究能力と国際能力の開発は、東北大学の教育のコアであり、プログラムの企画と運営を担当する医学教育推進センターでは、毎年、内容を更新して充実を図っています。

基礎研究に打ち込んだ学生時代

東北大学病院研修医

穴倉 匡祐



東北大学には、研究に対して強い意欲を持った学生を支援して下さる研究室がたくさんあります。

私は、その中で東北大学加齢医学研究所基礎加齢分野の堀内久徳教授のもとで2013年（医学部5年次）の夏からお世話になり、その成果を第一著者として論文にし、薬理学のトップジャーナルである British Journal of Pharmacology に2015年10月に採択されました。大変うれしく、また、後輩の皆さんの参考になればとそのプロセスを記させていただきます。

私は、大学入学時から基礎研究者を志望しておりましたが、5年生という将来の方向性を強く意識する学年になり、夢に向かって具体的に自分がどうしたらいいのかを把握していないことに気づきました。

そこで、具体的な将来のビジョンを獲得するために、まず、実験をしてみたいと、多くの学生が実験を楽しんでいると聞いていた堀内教授の研究室の門をたたきました。当初、分子生物学的手法を修得したいとも考えていましたが、お話しをしていると、堀内教授から、新しい白血球の研究分野を始められたいとのことで、私の立ち上げにトライさせて頂くことになりました。誰かの研究のお手伝いではなく、幸運なことに最初から自分で責任をもって実験を行うことができました。実験をする中でやはり思い通りにいかないことがたくさんあります。しかし、面白い結果が出たときは言い表せないくらい楽しい気持ちになるため、モチベーションを保ちながら続けることができ、放課後はもちろん、休日も頑張りました。研究所共通機器室の数千万円もする顕微鏡を頻用したのですが、予約を取り合ったのも今となってはい

い思い出です。

さて、結構データが集積して、論文にできる可能性が出てきたので、論文文化に向かうことにしました。いざ、まとめるとなるとデータが多いだけではだめで、すきなく、まとまった結論を導き出さなくてはなりませんでした。

今から思えば、ほとんどのデータがそろったと思って半分にも満ちていなかったように思います。成果を少しずつ積み重ね国家試験の勉強もそっちのけで、なんとか国家試験1か月前に論文を投稿することができました。今思うと大胆なことをしていたと思います。論文は、掲載までに科学雑誌に投稿した後、複数の審査員 (reviewer) の修正意見を Editor が評価し、追加で実験などによってしっかり答えて Editor が採択という判断をすれば掲載となります。

一回目に出した科学雑誌の審査結果は reject でした。あらがっても無理だと判断し、雑誌を換えることにしました。私の研究内容は、薬理的な手法が多かったので薬理学の雑誌に挑戦することにしました。3名の審査員は多くの条件を出しましたが、最終判断する editor の評価は良好であり、粘ることにしました。

国家試験も終わり、2015年2月、人生最後の春休みで旅行に行きたい気持ちもありましたが、どうせ最後の春休みだから将来のためにと割り切り実験しました。この辛い時期に、堀内教授を中心とする研究室の先生方に論文の執筆や実験のアドバイスなど多大なるご支援をいただきました。

それでも、学生の期間中に終わる量ではなく、卒業後

は後輩たちに主に実験を引き継ぎ、3回という通常よりも多くの修正の後、投稿から8か月後の10月に何とか掲載が決まりました。最終決定が来るまではわくわくしたり、不用意に焦ってみたりで大変でしたが、採択通知が来たときはこれまでの人生で一番嬉しかった瞬間です。

採択後に、表情が柔和になったと皆に言われ、いろい

ろな意味で集中していたのだと思いました。このように私は、この基礎研究を通して多くのことを学び、かけがえない経験をすることができました。

東北大学には、研究に対して意欲のある学生を支援してくださる研究室がたくさんあります。この恵まれた環境のもとで、多くの後輩たちにも研究にチャレンジしていただきたいと思います。

私の学生生活

医学部医学科 4年

相良 卓哉



(今までと4年生の活動)

東北大学に入学してから早くも4年が経ち、大学生生活の振り返り地点も過ぎて残りの学生生活も少なくなってきました。昨年度に基礎医学が終わり、今年度から臨床医学が始まりました。基礎医学と臨床医学を学ぶことで将来医師として働く楽しみと責任感がより一層増してきたと思います。また、今年度末には、CBT (Computer Based Testing) と呼ばれる全国の医学生が受ける試験と OSCE (Objective Structured Clinical Examination) と呼ばれる実習試験があり、我々4年生は、これらの試験に向けて日々勉学に勤しんでおります。

(研究関係)

私事になりますが、今年度から、研究サークル ARTs の立ち上げが決まり、その初代代表を務めさせて頂くことになりました。そのきっかけは、顧問の先生である堀井明先生、中山啓子先生、石井直人先生をはじめとする先生方から「研究をする学生に何らかの形で支援したい」とのお声かけがあり始まりました。

私は、2014年10月から2015年3月までの基礎医学修練の期間に、分子病理学分野で、アメリカのメリーランド州にある Johns Hopkins 大学で膵臓癌の研究をするため半年間留学しました。Johns Hopkins 大学は、医学の分野で1・2位を争う大学であり、そのような大学で研究をする機会を頂け、とても嬉しく、東北大学の力がグローバルな繋がりで驚きを隠せませんでした。

そこで気づいたことは、いかに効率よく物事を行うかということで、Johns Hopkins 大学の研究者のすごさを目

の当たりにしました。研究者達の能力の高さにも驚いたのですが、なによりも大きな違いは、研究者間の繋がりの多さでした。具体的には、全部の仕事を一りでやるのではなく、それぞれ得意な者(研究分野を問わず)に依頼し、意見を求め、それが仕事の質の向上につながっているのです。そこで、私は、研究サークルの立ち上げが決まったときに、東北大学で研究をしている学生達とコネクションを持つことができれば、海外の研究のように大きな力になるのではないかと考えました。ARTs の活動内容は、研究内容等の発表などを通して、研究の共有や世界で活躍する研究者の方にお越し頂き、講演会や意見の交換会をしております。研究といっても基礎研究だけでなく、臨床研究やバイオデザインなど東北大学で行っている国の事業のお話を聞いたりし、これらの活動から学んだことを生かしております。私たち自身も学会や関東リトリートと呼ばれる東日本を研究している学生達の発表会に参加して、成果を発表しており、個々の活動においては、学会発表で受賞などしております。

これらの活動は、研究第一を掲げる東北大学のグローバルな強さや先生方の協力がなければ出来なかったことだと思っております。

来年度からは病院実習が始まり、国家試験に向けて勉強していくことになります。今、自分にながでできるのか、自分にしかできないことは何なのかをよく考えて行動し、悔いの残らないように残りの学校生活を過ごしていきたいと思っております。

私の大学生生活

医学部保健学科検査技術科学専攻4年

梶山茉衣子



大学に入学してからの4年間は、今までに経験したことのないくらい、あっという間の時間でした。入学する前は、友達ができるのか、勉強にはついていけるのか、不安なことがたくさんありました。しかし、学校が始まり、東北大学、特に検査技術科学専攻の友達と仲を深めていくにつれ、ここにいるみんなは私と同じ目標を持ち、切磋琢磨していけるような存在であることに気づきました。実験や実習では何度も失敗をし、意見がぶつかることもありました。しかし、自分の意見を言えるのも、それをお互いに尊重できるのも同じ目標に向かって頑張っている検査技術科学専攻のみんなだからでした。そして、実習や卒業研究が終わる節目に、みんなでおこなう打ち上げは、大変だった分だけ達成感と喜びが大きいものとなりました。

検査技術科学専攻のみんなと過ごした時間は、卒業しても忘れられないものであるし、何年たっても薄れることのない大切な時間です。

また、私は、医学部軽音部に所属していました。大学

から音楽を始めたので初心者ではありましたが、部活の先輩や同期のみんなに励まされ、続けることが出来ました。楽器も下手で、こんな私でしたが受け入れてくれて仲良くしてくれた部員のみなさんにはとても感謝していますし、医学部軽音部に出会えて大学生生活が充実しました。

そして、大学に入学してから高校生活まではしたことのなかったアルバイトを始めました。初めは、学生生活の延長として考えていましたが、働いていくうちに、社会人の先輩方の仕事に対する姿勢、さらに、働くことの喜びを徐々に実感していきました。先輩方のことを本当に尊敬していて、先輩方と出会うことができ、自分が社会人になったときの理想、目標を描くことが出来ました。

大学生生活を通して、私は自分の意見をしっかり伝えること、他人の考えを尊重すること、そして、目標を持つことができるようになり、4年前の自分とは全然違う自分に出会えることができました。たくさんの経験をさせてくれた周りの人たちに、とても感謝しています。

医学分館 学習用図書整備・充実について

東北大学附属図書館医学分館長

丸山 芳夫

医学分館は、医学系の図書館として、星陵キャンパスに所属する学生及び教職員の方々に、研究及び教育に必要な図書や学習環境を日々提供しています。

医学系の図書は単価が高く、頻繁に改版されるため、いちどに整備することが困難です。ここ数年に受入した新刊本の割合は、蔵書の2割程度にとどまっております。新刊本をよく利用する学生にとって、まだまだ十分な学習環境とはいえません。



このような状況から、医学部後援会にお願いしたところ、昨年度に引き続き図書購入のご支援をいただきました。この度のご支援により、

医学分野『クイックマスター病理学』ほか74点、看護分野『看護学生のための実習の前に読む本』ほか22点、

放射線技術分野『腹部の連想画像診断：画像に見えないものを診る』ほか4点、臨床検査分野『臨床検査法提要』ほか2点で合計106点の新刊本を整備できました。寄贈図書は、エレベーター脇に9月から展示しています。



医学分館では、国試・学習用図書コーナーの設置、貸出冊数・期間の拡大、朝7時からの時間外利用拡大など、よりよいサービスを提供できるよう順次改善していきます。上記のような図書購入と合わせて、自学自習の場として環境整備して、館員一同お待ちしておりますのでぜひご活用ください。この度は医学部後援会からの御支援をいただき誠にありがとうございました。この場をお借りし、改めて感謝・御礼申し上げます。

東北大学医学部後援会主催「入学記念祝賀会」の御案内について

後援会では、平成28年4月に東北大学医学部医学科及び保健学科に入学する新入生及び保護者の方を対象とした「入学記念祝賀会」を開催いたします。

この祝賀会では、医学部教職員及び在学生による学科の紹介・説明・在学中の勉学や学生生活の様子等について懇談が行われます。

後援会会員の皆様におかれましては、会員同士が集う良い機会と思われまますので、お誘い合わせ願ひ、御出席くださいますようお願いしております。

なお、当日は、東北大学全体の入学式（午前中）が行われますので、午後に会場を移動して開催するものです。



- ★日時：平成28年4月6日（水）
午後1時から（2時間程度）
- ★会場：江陽グランドホテル・鳳凰の間
（仙台市青葉区本町2丁目3-1）
TEL：022-267-5111）
- ★祝賀会の主な内容
 - 医学部長挨拶
 - 後援会会長挨拶
 - 来賓等の紹介・祝辞
 - 祝宴・懇談
 - 医学科及び保健学科の紹介・説明 など
 - 在学生から歓迎挨拶 等々
- ★会費：無料です。
- ★その他：軽食及び飲み物を準備しておりますが、事前のお申込みは不要です。

編集後記

仙台市では、12月6日に南北線に続く2本目の市営地下鉄として、東西線が開業しました。

東の海沿いの田園地帯（若林区）から西の丘陵地帯（太白区）までの13駅、13.9kmを26分で結びます。

これに伴い、縦横に十字型となる軌道系交通軸が完成し、市内各地へのアクセスが向上し、地域間交流の活発化や沿岸開発の進展が期待されます。（河北新報から抜粋）



さて、まもなく新年度になり、希望と夢に溢れた新入生が東北大学医学部に入学してまいります。発足9年目を迎える医学部後援会は、新入生の皆様の入学を心からお慶び申し上げ、入学後の学生生活などの支援の一助を担えさせていただければ幸いです。

本後援会は、学生への支援・助成活動〔入学記念祝賀会開催、新入生オリエンテーション及びオープンキャンパスへの助成、学生用図書整備・充実、卒業謝恩会への助成、後援会会報の発行等〕などに積極的に取り組み、その活動の様子を年2回発行の後援会会報で会員（保護者）の皆様方にお知らせしております。

また、学生、保護者そして、本学部教職員との交流にも努めております。

つきましては、後援会のさらなる発展・充実のために、会員の皆様方からの寄稿をお待ちしております。

御寄稿は、郵便又は電子メールでお寄せ下さいますようお願い申し上げます。



医学部後援会 事務局



東北大学医学部後援会事務局

〒980-8575 仙台市青葉区星陵町2-1
TEL：022-717-7870 E-mail：med-koen@med.tohoku.ac.jp
http://www.koen.med.tohoku.ac.jp/